

公開セミナー「憲法が変わる（かもしれない）社会」報告

高橋 源一郎

2017年度の国際学部附属研究所主催の公開セミナーは「憲法が変わる（かもしれない）社会」と題して、11月14日から毎週火曜日に開催された。最初は「憲法が変わる社会」と、（ふつうの）テーマであったのに、（かもしれない）という、やや聞き慣れない字句を挿入したのは、ただ生真面目なセミナーであると誤解されるのを避けるためでもあった。愚直に討論し合う場所も大切であり、おおむね大学で主催されるセミナーや討論会はそのような空間になりがちだ。だが、時には、そんな「枠」を超えることも必要なのではないかと主催者として考えた。それはなにより、当該セミナーが、近年、もっぱら「外」に向かって開かれることを意図して開催されてきたからだ。この公開セミナー出席者の過半は大学外部の人たちであり、とりわけ、キャンパスのある戸塚近辺の住民の方が多い。それも、リタイアした後、ひとりの個人としてもう一度、なにかを学びたいと切実な欲求を抱いた人たちだ。ありていにいうなら、それらの人たちは、学生たちよりも強い「向学心」を持っているといってもいいだろう。わたしは、長年、この公開セミナーをお手伝いしながら、いつも彼らのことを考えていた。もし、大学に「未来」があるなら、そんな彼らの力が必要かもしれない。そんなことを考えながら、「外部」へのメッセージとして付け加えたのが、大学らしくない、（かもしれない）の文言だった。もちろん、内容についても同じことがいえるだろう。「大学」や「学問」の枠組みの中で、「憲法」について考えてゆくことと、「憲法が変わってゆく、あるいは、変えられてゆく、時代や社会」について、いま自分自身が社会の中でどんな役割を果たしているのかということに直面している人たちと共に考えることは、違わずである（もちろん、学生たちも同じ問題に直面しているはずなのだが、その危機意識の度合いを比べるなら、「外部」の人たちにはかなわない）。

以上の問題意識を踏まえ、「憲法」、あるいは「憲法が変わる社会」について、最適と思われる講演者を選び、登壇を依頼し、幸い、承諾していただいた。この企画が、単に、個人の思いつき以上の、あるいは一般的な大学の公開セミナーの枠を超えることができたと思えたのは、その反響の大きさに遭遇してからだ。この奇妙なタイトルと登壇者のリストは関心を呼んで、セミナー開始前にある新聞に記事が掲載された。以来、研究所には問い合わせの電話が鳴りやまなかった。

公開セミナー初日、わたしは戸塚駅からバスに乗ったが、大学行きのバスが停車する乗り場には長蛇の列が出来ていた。その大半は、高齢者のようであった。わたしは最初、今日は、養老院の説明会でもあるのかと思った。そして、彼らが大学のバス停で降りて初めて、わたしは、公開セミナーの出席者であることを知ったのだ。第一回の公開セミナーの出席者はおよそ700名。登壇者は憲法学者の長谷部恭男氏。大教室に入りきれない人たちは外に溢れた。また、会場内も異様な熱気に包まれていた。以降、5回にわたるセミナー（登壇者は順に、政治思想学者・片山杜秀氏、憲法学者・石川健治氏、映画監督・森達也氏、ジャーナリスト・国谷裕子氏、そして特別

ゲストで元研究所所長・原武史氏)の総出席者は 3352 名。すべての回で大教室は満員になり、途中から、別教室を用意し、メインの教室の画像を送ることにしたのである。詳細は、文藝春秋から 7 月 26 日に刊行された、公開セミナーの記録『憲法が変わるかもしれない社会』におさめられている。ぜひ手にとり、その特別な場所で何があったのか、読んで知ってもらいたいと思う。タイトル名が変わり、(かもしれない)がとれたのは、さらに広く深く伝えるためであった。

